AMEI NEWS

Association of Musical Electronics Industry

Vol.88

2026年5月18日発行

CONTENTS

- AMEI NAMM 2026ツアー報告 1～4
- 生成AIサービスの最新情報研究 5～6
- MIDI検定試験実施結果報告 7
- AMEI会員名簿・令和8年度MIDI検定告知 8

第26回 NAMMビジネスツアー報告

今年のNAMM SHOWの展示会は、2026年1月22日～1月24日の期間、米国カリフォルニア州アナハイム･コンベンションセンターにて開催されました。NAMM創立125周年のアニバーサリー年となった今回は、入場登録者数は60,000人以上、総出展者数は1650社を超えたと発表されました。数字上は前年を若干下回った模様です。昨年に引き続きの実施となりましたMIDI規格委員会主催の第26回NAMMビジネスツアーは、昨年同様、米国の物価高と為替レートの円安という厳しい環境下での実施となりましたが、8名の参加を得て、1月21日出発～1月26日以降の帰国のスケジュールにて、無事実施することができました。ツアー参加者の皆様、お疲れ様でした。

AMEI NAMM 2026 ツアー報告

MIDI 規格委員会 委員長　冨澤 敬之

2026 年 1 月 22 日 – 24 日、米国アナハイム・コンベンションセンターにて NAMM Show 2026 が開催されました。私にとっては 3 回目の NAMM Show となりますが、今回は初めて AMEI NAMM ツアーに参加させていただきました。ツアーは 1 月 21 日 – 26 日の期間で実施され、AMEI 事務局の下山さんが同行してくださったこともあり、移動や各種手続きが非常にスムーズでした。

● 初日

前回の訪問時も QR コードを使った受付システムでしたが、バッジ受け取りの列が長く、かなり時間を要した記憶があります。今回はショー前日のため混雑がなく、“Exhibitor” としてスムーズに入場することができました。入場すると、まずは MIDI Association メンバーへの挨拶を済ませ、続いて MIDI Association ブースでの展示機材の準備に取り掛かりました。プログラムのアップデートや接続テストなどをサポートしました。

初日の夜には、ツアー参加メンバーで食事会が開かれました。各社立場は異なりますが、同じ業界で共通の方向を向き、情報交換や意見交換ができる時間はとても有意義で、業界全体をより盛り上げていきたいという思いが強まりました。(余談ですが、骨付き肉をまるで最初から骨だけだったかのように綺麗に食べ尽くした方がいて、ビックリしました)

● 会場の様子

今年も例年通り MIDI Association の会場が設置され、メンバー企業によるプレゼンテーションや展示、策定中の MIDI 2.0 規格の最新状況についての説明が行われました。今回は 木曜日：Product Day、金曜日：Developers Day、土曜日：Initiatives Day とテーマごとに構成されており、非常に充実したプログラム内容でした。会場レイアウトも工夫されており、中央にステージを配置し、来場者が行き交う動線に沿って展示コーナーを設けることで、展示説明やデモが行いやすい構成になっていました。またステージ裏には MIDI Innovation Awards の受賞作品が展示されており、担当者によるデモンストレーションが常時行われていました。

● 木曜日：Product Day

この日は AMEI、BomeBox、StudioLogic、Windows MIDI 2.0 によるプレゼンテーションが行われました。私にとって今回の訪問目的のひとつでもある AMEI プレゼンテーションでは、KAWAI の入村さんと共にステージに登壇し、日本における MIDI 規格委員会の活動内容や、MIDI Association と築いてきた連携体制について紹介しました。ショー初日だったこともあり、全体的に聴講者は少なめで、予定されていた Waldorf のプレゼンテーションは来場者数が少なかったためキャンセルされました。全体としても例年より入場者が少なかったようで、特に楽器関連よりプロオーディオ側のほうが活気があったように感じました。

● 金曜日：Developers Day

この日は BLE MIDI 2.0、Web MIDI 2.0、SMF2 に加え、Piano ／ Drum ／ DAW ／ Orchestra 各プロファイルの現状や今後の展望が共有されました。セッション終了後には聴講者から熱心な質問が寄せられ、実装段階へ向けた期待の高さを感じました。

また、ある開発者からは Piano Profile 仕様に関する技術的な質問を個別に受け、時間をかけて説明を行いました。こうした直接的な意見交換を通じて、実装への意欲をさらに高めてもらえたのではないかと思います。夜には「Japan Member Reception」が開催され、日本からの参加者が集まり交流できる貴重な機会となりました。NAMM に参加される方にとっては、多様な業種の方々と出会える非常に有意義な場になり得るため、ぜひ活用をお勧めしたいイベントです。

● 土曜日：Initiatives Day

土曜日は、2 つのアワード紹介、教育関連、アクセシビリティなどをテーマにしたセッションが行われました。木・金曜日と比べると聴講者も多く、特に Life Time Achievement Award のセッションは DAW 関連の著名人が登壇したこともあり満席

となるほどの盛況ぶりでした。また、各日の夕方にはアーティストによるライブパフォーマンスが行われ、ブースを大いに盛り上げていました。

音響や映像のオペレーションは専任スタッフが担当し、会場はサポートスタッフによって的確に運営されており、非常にスムーズに機能していました。また、MIDI Association 関係者との会話を通して、認識のすり合わせや情報共有、今後の取り組みについて意見交換を行うことができ、これまで以上に良好な関係を築く機会になったと感じています。

今年の MIDI Association ブースは、例年以上に内容が充実しており、展示レイアウトも一層洗練されたものでした。MIDI 2.0 を通じて業界を盛り上げ、ユーザーがより快適に音楽制作を楽しめる環境を広げていこうとする強い意志が感じられました。AMEI としても、MIDI Association と協調しながら、MIDI 2.0 の本格的な普及に向けて、MIDI 規格委員会の取り組みを推進してまいります。

今後も情報共有に加え、ダイレクトな意見交換を積極的に進めることで、規格団体として双方が連携し、MIDI という共通言語を通して、ユーザーを始めとした関係者の皆様を力強く支援できれば、と思います。

NAMM2026 ツアー報告

ヤマハ株式会社　杉島 章弘

本年の NAMM ツアーには、弊社から 4 名参加させていただきました。自身は 6 年ぶりの NAMM 視察でしたので、空港や道中の風景なども忘却の彼方にあり、ある意味では新鮮な気持ちでツアーへと参加することができました。なお例年よりも入国審査が円滑だったそうで、実際に待ち行列にはほぼ並ぶこともなく順調に通過することができました。また、空港からの移動やホテルのチェックインなどの手続きにおいても大きな問題が生じることはなく、これも各種の手配を手慣れている事務局にて実施いただいていたお陰です。期間を通じて全くと言って良いほどトラブルのない快適なツアーとなり、事務局ならびに同行された皆さまに感謝です。本当にありがとうございました。

さて、近年の NAMM は出展社数なども減少傾向と聞いていましたが、まだまだ勢いは失われていない印象でした。やはり世界最大の楽器展示ショーということもあって、出展各社の多くのブースでは説明やデモなどには熱量多く取り組んでおり、それらを見たり聞いたりやり取りする中で自身は大きな刺激を受けました。展示には電子楽器だけではなく、管弦打を含めたアコースティック楽器や PA 機器、あるいは DAW などのアプリケーションソフトもあり、事前に NAMM 公式アプリなどで予習や準備をしていたものの、視察の 3 日間を過不足なく使い切ることができるといった規模でした。AMEI と MA のブースにも常に見学者が来ており、そこで活発なやり取りをしている場面も目にしましたので、概ね盛況だったと感じました。一方でセミナーについては、なかなか集客に苦労している印象を受けました。MIDI の世界観やプロトコルに一般の見学者にも強い関心を持ってもらうことは簡単ではないですので、想定の範囲内でのことかと思います。なお NAMM 開催中は、基本的にはツアーメンバー各々はフリープランでしたので、特に制約なく各社の出展ブースを自由に見て回ることができたことも、とてもありがたかったです。

NAMM の後に、弊社メンバーは 2 日間の延泊をさせていただき、アナハイムやロサンゼルス周辺の市場調査を行いました。販売店などを訪問した際にも、今回の NAMM を見学してきたユーザーが製品を探して試奏するために店頭に訪れている、という事例が確認できました。またメガチャーチ（教会）を訪問して、近年では教会音楽の主流となっている Worship 演奏の現場に立ち会えたことは非常に印象深かったですし、この市場を知る上での貴重な体験となりました。

このように NAMM ツアーでは、ある程度柔軟に旅程を調整させていただける点も参加者にとって使い勝手が良いと感じる部分です。また、各社からツアーへ参加された皆さまとの交流もたいへん有意義でした。現地入りした初日の食事会などを通じて互いに親睦を深めながら様々な情報交換をすることで、同じ業界の各社がより良い商品作りのために日々取り組んでいることについての共感や、参加者間での一体感も生まれていたかと思います。今回の NAMM ツアーを通じて様々な商品や知見に触れることで得られた新たな着想を、自身も今後の開発業務へと還元していきたいと思います。来年以降も NAMM ツアーを続けていただきたいですし、参加を検討されている方には是非ともお勧めしたい良い活動でした。

NAMM2026 ツアー報告

ヤマハ株式会社　星川 大輔

NAMM ショーは、世界最大規模の楽器見本市です。音楽好きが高じて楽器業界に身を置くようになった私にとって、いつか訪れてみたい憧れのイベントでした。そんな折、上司からお声がけをいただき、迷うことなく NAMM ショーへの参加を決めました。初めての渡米ということもあり不安はありましたが、AMEI ツアーでは往復のフライトや宿泊先のホテル、現地空港からホテルまでのシャトルバスが手配されており、初日の NAMM 会場でのバッジ（参加証）受け取りまではツアー参加者全員で行動できたため、大きなトラブルもなく出張を終えることができました。また、出張期間中はツアー参加者と楽器業界に関する情報交換を行うことができ、参加前の不安以上に得るものの多い出張となりました。参加して本当に良かったと感じており、私自身の経験から、参加を迷われている方にはぜひ背中を押してあげたいです。

今年の NAMM ショーは 3 日間にわたって開催されました。会場となったアナハイム・コンベンションセンターは非常に広く、効率よく回らなければすべてのブースを見ることはできません。私は事前にダウンロードしていた公式アプリを活用し、ウォッチリストを作成して目的のブースの位置をある程度把握したうえで会場に臨みました。それでも出展企業すべてを網羅することはできず、結果的に毎日 10km 以上を歩き回ることになりましたが、それも含めて良い経験となりました。NAMM ショーに参加する際は、お洒落よりも歩きやすい靴を選ぶことを強くお勧めします。

NAMM ショーの会場では、電子楽器をはじめ、ギターやドラム、DJ 機材など多岐にわたる新製品を実際に見て触れることができました。また、現物を前にしながら各ブースの説明員に展示品の疑問点を直接質問できる点も、展示会ならではの大きな魅力だと感じました。さらに、来場者が楽しそうに楽器を演奏したり、演奏を聴いたりしている様子を間近で見ることで、ユーザー視点での理解を深めることができ、視野を広げる貴重な機会となりました。

楽器業界は成熟産業と言われがちですが、今回の NAMM ショーを通じて、各社が音響性能だけでなく、デザイン面や機能面においても工夫を凝らし、差別化を図っている点が強く印象に残りました。特に中国メーカーの勢いは目覚ましく、市場要求の変化に対する対応力の高さに圧倒されました。また、スマートデバイスと楽器を組み合わせた展示も多く見られ、新しい分野への挑戦が、今後の楽器業界において重要になってくることを強く感じました。

私は日程を延長し、弊社の米国拠点や LA 近郊の教会なども訪問しました。これにより、NAMM ショーでの情報取集だけでなく、現地の文化や生活の違いについても体感することができました。こうしたオプションにも柔軟に対応していただける点も、AMEI ツアーならではの魅力だと感じています。この度は、本ツアーを企画いただき、誠にありがとうございました。機会があれば、ぜひまた参加させていただきたいと思います。

NAMM2026 ツアー報告

ローランド株式会社　和田 紀彦

2026 年 1 月、アメリカアナハイムで開催された NAMM SHOW 2026 に参加しました。今年は NAMM 創設 125 周年という節目の年であり、会場内の随所に「NAMM 125」の記念ロゴが掲出され、祝祭感のある特別な雰囲気に包まれていました。今回のツアーには Roland から 3 名が参加し、限られた時間ながら濃密な視察と交流を行うことができました。まず、このような貴重な機会を企画・手配いただいた関係者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

国内の楽器メーカー各社の社員と AMEI を通じて同じツアーとして行動できたことは、非常に有意義でした。普段は競合関係にある企業同士であっても、海外展示会という非日常の場で共通の目的を持ちながら動くことで、率直な意見交換や情報共有が生まれ、社内で情報共有するときとは違った論点で業界全体の会話ができたのも非常に良い機会でした。

個人的には公私ともに DJ 業界に関わっており、DJ 関連製品の新製品を見始めると時間を忘れてしまい、気づけば 1 日があっという間に過ぎていました。参加した 3 日間は非常に短く感じられ、もっと見て回りたいと感じるほど内容が充実していました。実際に現地で実機に触れられることはもちろん、各社の展示手法、世界観づくり、製品の魅せ方を間近で観察することで、今年のトレンドや各ブランドの戦略を深く読み解くことができた点は大きな収穫でした。もともと私は長年機構設計者として製品に携わってきましたが、最近は製品企画にも関わるようになったため、現場でこうしたアプローチを直接見ることができたのは非常に学びが多く、自分の視野を広げる良い機会となりました。

特に印象的だったのは、ブースが掲げる音楽ジャンルや空間演出によって、集まる来場者の人種やファッション、雰囲気が明確に変わることです。音楽文化がダイレクトに来場者の空気感として表れており、こうした視覚的な違いはオンラインの情報では得られず、現地ならではの気づきでした。加えて、各ブースで行われるデモ演奏やアーティストのライブパフォーマンスは非常に高い熱量を持っており、製品そのものの魅力だけでなく、ブランドが伝えたい価値観を強く体感できました。こうした「現場の熱」に触れることで、製品が生まれた意図や魅力をどのようにユーザーへ伝えるか、その伝え方の大切さをあらためて実感しました。

また、来場者がどの製品に興味を示し、どのように操作し、どのポイントで立ち止まるのかを観察することで、ユーザーのリアルなニーズを把握することができました。著名アーティストも多く来場しており、日頃お世話になっているアーティストの方々と現場で直接交流する機会にも恵まれ、非常に充実した時間となりました。

今回得た知見を社内で共有し、今後の製品企画に活かし、製品・サービスを通じて楽器業界全体の発展にも寄与していきたいと考えております。

生成AIサービスの最新情報研究

著作権・ソフト委員会　副委員長　堀江 康明

1 はじめに

AMEI 著作権・ソフト委員会では、二つの異なる方向のアプローチから最新の生成 AI サービスに関する研究を行っています。一つはソフト規格部会の海外ビジネス展開 WG において、海外の法制や裁判例をピックアップして、特に AI がコンテンツを作成することに対する生成 AI 提供事業者の責任や法的手続きの情報の取りまとめを行っています。もう一つは、音楽配信部会において、生成 AI コンテンツを配信する場合に配信事業者側で留意する点および著名サービスの対応例の情報共有を行っております。

本稿においては、この二つのアプローチでの研究経過について概説し、著作権ソフト委員会としての生成 AI コンテンツの考え方について説明させて頂きます。

2 生成AIサービス提供事業者の海外の法的手続きおよび責任

日本においては、著作権法 30 条の 4・同 47 条の 5 により著作権の権利制限が存在するため、生成 AI 開発提供者の直接侵害責任を問う訴訟が存在しないされています。

しかし、日本著作権法の母法であるドイツ著作権法では、日本の機械学習に近しい概念である「テキストデータマイニング」は、著作権の制限事項として認められていません。パブリックドメインや法的にアクセスを認められた著作物以外を生成 AI に取り込むデータマイニングには許諾が必要というのが基本です。ドイツの音楽著作権管理団体である GEMA は、ChatGPT における歌詞データの取り込みについて Open AI と、有名作品とよく似た生成 AI 楽曲について Suno と、それぞれ訴訟を継続しています。

また、アメリカにおいては、生成 AI 関連の複数の訴訟が WG 時点でも進行中となっていて、多くは生成 AI への既存データの取り込みがフェアユースに該当するかが争われています。音楽コンテンツに関しても UMG RECORDINGS v. SUNO 事件において、著作権で保護された音声録音を大量にコピーして、自社の AI モデルに取り込んだことが著作権を直接侵害するかどうかという点で争われています。

3 生成AIコンテンツの配信事業の側面

音楽配信部会では、配信事業者の立ち位置から「ライセンス許諾を得て配信したコンテンツが生成 AI の創作作品だった場合」というテーマで検討を行っておりました。ライセンス許諾契約には著作権非侵害の保証条項があることが一般的ですので、過度に心配する必要はありませんが、ユーザー対応もあるため、背景事情は把握しておくほうがベターだと思われます。

この点について、コンテンツアグリゲーションも手掛けられているクリムゾンテクノロジー様より非常に有用な資料を作成頂きましたので、ご紹介させて頂きます。

昨今増加している生成AIを使用した音楽作品に関する現状と課題について

1）争点

- 学習（Training/Ingestion）：無断学習か／許諾・対価・透明性（監査可能性）をどう担保するか
- なりすまし（Voice/Likeness）：声・似姿の無断複製（ボイスクローン / ディープフェイク）をどう止めるか（著作権だけでなく、プラットフォーム規約＋本人同意で執行）
- 収益毀損（希釈・詐欺）：AI 大量生成＋ボット再生等でロイヤリティプールが薄まり、不正受給が増える
- 透明性（開示・ラベル）：AI 生成 / 改変の表示、来歴、検知技術の導入

2）大手レーベルの方向性

- 無断学習への対立姿勢は継続しつつ、案件によっては訴訟→和解＋提携（ライセンス型）へ転じる例も出始めた
- 声・作風のなりすましを最大の実務リスクとして大量の削除要請（テイクダウン）を継続（Sony のケースなどが報道）
- AI 量産曲＋不正再生を「人間アーティストの収益が削られる問題」として強く問題視（業界レポートでも明確化）

3）以下 DSP（Digital Service Provider）別方針要約

A 社

- なりすまし（声真似 /AI ボイス）禁止を明確化、削除導線を強化
- AI スパム / 不正対策（大量削除、フィルタ強化）を前面化
- AI 利用のクレジット開示（DDEX 連携）を推進

B 社

- AI 生成・改変の開示（ラベル）制度化（誤認防止）
- “likeness（似姿）” 検出・申立て強化（深層偽造対策）
- 音楽 AI の実験は権利者と条件設計（許諾 / 表示 / 帰属）をセットで進める方向

C 社

- AI 生成コンテンツのラベル付け要件（特にリアル系は強め）＋来歴の自動ラベルを推進
- レーベル交渉では「AI 生成音源増加による収益毀損」等が争点化

D 社

- AI 生成曲の検知・タグ付けを導入、推薦から除外する方針
- AI 生成曲のストリーミング詐欺を問題視し、不正ストリーム除外の文脈が強い

E 社

- 規約の AI 条項を巡る議論を受け、同社は学習利用の否定 / 説明、将来的に行うなら明示的オプトイン方向を示唆

F 社

- AI 生成音楽の禁止を明確化（入口で排除するモデル）

G 社

- 生成 AI は主にプレイリスト生成・探索 / 推薦の高度化（“音源生成” より体験 AI）
- パブリックドメイン楽曲については「承認されない可能性がある」

4 著作権・ソフト委員会での検討

生成 AI と音楽コンテンツのかかわりについては、AI の機械学習やコンテンツ創作に関する著作物の複製という側面（いわゆる AI 創作以前）と、生成 AI によって創作されたコンテンツをライセンス許諾受けて配信をする側面（いわゆる AI 創作以後）があり、部会・WG ではそれぞれの側面を別々に検討をすすめていますが、著作権・ソフト委員会として両方の側面をスコープに入れ、今後も検討を進めて参ります。

MIDI検定試験実施結果報告

MIDI 検定指導研究委員会　上杉 尚史

2026 年 2 月に実施された MIDI 検定 2 級 2 次試験の採点が 4 月頭に終了し、令和 7 年度の MIDI 検定事業が一段落いたしました。

ここ数年受験者微減の状況が続いておりましたが、2 級 2 次試験に至っては 20％程度増加するなど、MIDI を使用したクリエイティブ活動に興味を持つ人口が少しずつ増え始めている印象です。

そんな中、試験運営チームが危惧しているのが AI による解答です。MIDI 検定ではオンライン試験を導入しておりますが、問題文を AI に投げることで解答を導き出すという受験者がいた場合、それを抑止する方法が難しいという点です。会場受験では監視という方法が使えますが、現状のオンライン試験では受験用の PC 以外にスマートフォンなどを併用すると不正ができてしまうという事実があります。できる限り AI のみでの解答が難しい問題を制作しているのですが、こればかりは AI の進化が早く落とし所が見つからないというのが現状です。

AI の使いこなしも含めて、出力した結果に責任が持てる人材ということであれば、それも認めていくというのも考え方の一つではありますが、全体像を把握して今後の MIDI 業界にプラスとなる人材はどのような人なのか・・・ということを改めて見直さなくてはいけない時代に突入したと感じています。

もちろん、過去の試験運営のようにすべてを会場におけるリアル受験のみとする案もあるのですが、ネットワーク時代にデシタル関連の試験をおこなうのがアナログ方式のみというのでは何とも皮肉な状況になってしまいますので、今後も引き続き運営方法の改善などを検討していきたいと考えております。

MIDI 検定は 1999 年 1 月 17 日第一回の 3 級筆記試験を実施し、その年の 12 月に第二回を実施。以後毎年 12 月に開催して 2026 年 12 月には 29 回目を迎えます。2027 年には第三十回を、2029 年 1 月には MIDI 検定 30 周年を迎えようとしておりますので、上記試験運営にまつわる懸念事項なども払拭しつつ、あらたな時代に対応できる検定事業となるように検討していきたいと思います。

MIDI 検定試験結果の推移（国内）

		令和３年度	令和４年度	令和５年度	令和６年度	令和７年度	第１回からの累計
３級		第 24 回	第 25 回	第 26 回	第 27 回	第 28 回	
	実施日	2021	2022	2023	2024	2025	
		12/5	12/4	12/3	12/1	12/7	
	受験者数	294	338	286	255	259	28052
	（内学校）	167	197	187	166	195	14455
	合格者数	123	199	185	158	171	18831
	合格率	41.84%	58.88%	64.69%	61.96%	66.02%	67.13%
２級１次		第 23 回	第 24 回	第 25 回	第 26 回	第 27 回	
	実施日	2021	2022	2023	2024	2025	
		12/5	12/4	12/3	12/1	12/7	
	受験者数	103	77	73	59	51	6633
	合格者数	44	53	40	47	43	3400
	合格率	42.72%	68.83%	54.79%	79.66%	84.31%	51.26%
２級２次		第 23 回	第 24 回	第 25 回	第 26 回	第 27 回	
	実施日	2022	2023	2023	2024	2025	
		2/19 ～ 21	2/18 ～ 20	2/17 ～ 19	2/15 ～ 17	2/14 ～ 16	
	受験者数	45	40	36	28	33	3824
	合格者数	27	32	26	13	21	1533
	合格率	60.00%	80.00%	72.22%	46.43%	63.64%	40.09%
１級		第 13 回	第 14 回	第 15 回	第 16 回	第 17 回	
	実施日	2021	2022	2023	2024	2025	
		8/6 ～ 16	8/5 ～ 15	8/11 ～ 21	8/9 ～ 19	8/8 ～ 18	
	受験者数	23	10	21	19	20	696
	合格者数	9	5	10	5	11	237
	合格率	39.13%	50.00%	47.62%	26.32%	55.00%	34.05%
国内受験者合計		465	465	416	361	363	39205
４級	合計	141	108	105	63	104	3095
１級～４級受験者総数		606	573	521	424	467	42300

会員名簿

50音順　2026 年 5 月 1 日現在

あ

- AlphaTheta 株式会社

い

- 株式会社インターネット

え

- 株式会社エクシング

か

- カシオ計算機株式会社
- 株式会社河合楽器製作所

く

- クリプトン・フューチャー・メディア株式会社
- クリムゾンテクノロジー株式会社

こ

- 株式会社コルグ

し

- 株式会社シーミュージック
- 学校法人尚美学園
- 株式会社シンクパワー

す

- 株式会社ズーム
- 株式会社鈴木楽器製作所

た

- 株式会社第一興商

て

- ティアック株式会社
- 株式会社ティーファブワークス

な

- 株式会社 nana music

に

- 一般社団法人日本シンセサイザープロフェッショナルアーツ

は

- パイオニア株式会社

や

- ヤマハ株式会社
- 株式会社ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス

ろ

- ローランド株式会社

〈正会員会社 22 社〉

＊賛助会員

- 中音公司　（中華人民共和国）
- 株式会社博秀工芸
- 株式会社ミュージックトレード社
- 株式会社リットーミュージック

〈賛助会員会社 4 社〉

令和8年度
「MIDI検定」
―ミュージッククリエイターのためのライセンス制度―

MIDI検定試験	1級試験	2026年　8月7日（金）～8月17日（月）
	3級試験	2026年12月6日（日）
	2級1次（筆記）	〃　（日）
	2級2次試験	2027年2月13日（土）～2月15日（月）
指導者認定講座	4級指導者認定講座	2026年5月31日（日）
	3級指導者認定講座	2026年7月26日（日）
	2級指導者認定講座	2026年9月27日（日）

AMEI NEWS　Vol.88 / 2026.5.18
一般社団法人音楽電子事業協会　機関誌
発　行：一般社団法人音楽電子事業協会　事務局
〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町 2-16-9 イトービル 4F
TEL.03-5226-8550　FAX.03-5226-8549
発 行 人：下山 恒一
編 集 人：石黒 士郎（広報委員会）
編集協力：株式会社 博秀工芸
ホームページアドレス：
http://www.amei.or.jp/